★――はじめに

「学級経営」というのは、一口には語れないものです。

学級集団というのは、よい方向に進むか、悪い方向に進むか、このどちらかだからです。

よい方向に進んでいる場合であれば、上昇させる指導が必要になるし、悪い方向に進んでいれば、下降を食い止めるような指導が必要になります。

学級の状態に合わない指導をしてしまうと、取り返しのつかない事態ともなりかねません。たとえば、学級が荒れている状態だとしましょう。

教師と子どもの関係がよくない。

子どもと子どもの関係づくりも、不十分です。

そんななかで、「友だちのいいところを見つけて、放課後に発表しようね！」というような実践をしたとすれば……

どうでしょうか。

きっと、その実践は機能しないでしょう。

それどころか、より険悪な雰囲気をもたらしてしまうことでしょう。

おそらくその担任教師は、ほかの教師の実践を見て、「これはいい。やってみよう」と考えてやるわけですが、それは学級の状態を考慮していないのです。

学級の実体にそぐわない実践を行えば、それで余計に学級の状態を悪くしてしまいます。

このように、人の実践を模倣して、よくない結果になることを「ヤケド」といいます。

負の状態に入っているのであれば食い止める必要があるし、正の状態に入っているのであれば、さらなる高みを目指す指導が必要になるわけです。

私は、学級経営には2つの種類があると考えました。

それが、「攻める学級経営」と「守る学級経営」です。

「攻める学級経営」では、ある程度学級が安定している状態から、さらに高める手段を提案します。

「守る学級経営」では、学級が不安定な状態から、崩さないようにしつつ、少しでも安定させるための手段を述べていきます。

本書は**「守る学級経営」**です。

この本を読むことによって、次のような効果が期待できます。

- **教師のあるべき姿が再確認できる**
- **子どもと教師の関係を切れないようにできる**
- **学級の悪化を防ぐような指導ができるようになる**
- **学力を保障する授業がつくれるようになる**
- **学級崩壊への対策ができる**
- **子どものウソを暴くことができるようになる**

崩壊へと進み始める学級を、どのように食い止めるのか。

学級の状態が悪化しないようにするためにできることは何なのか。

一緒に、改善の方法を考えていきましょう。

目次

はじめに……1

第一章 教師のあり方を見直す……9

1——よりよい教師になるために
2——子どもの「表情」や「しぐさ」から本音を読みとる
3——姿勢を読み解く
4——繊細であることの強みを活かす
5——暗黙の教えに気をつける
6——学級内のインフルエンサーになる
7——信用を得る
8——5つの影響力をもつ
コラム1　謝罪は学級状態をはかるリトマス紙

第二章 切れない関係をつくる……45

1——アフターフォローを忘れない
2——ボーダーを決めて伝える
3——叱られ方を教えておく
4——反抗されたら質問する
5——テンションを下げさせる
6——小さなトラブルは時間をあける
7——最高と最低を想像する
8——子どもと大人はちがうことを理解させる
コラム2　二文をつなげて伝える

第三章 学級指導で悪化を防ぐ……67
1——叱責することの問題点と正しい使用方法
2——やってはならない叱り方「ダブル・バインド」
3——子どもの努力を無駄にしない
4——過失は責めて、失敗は責めない
5——学級のボスを指導する
6——ボスの側近を指導する
7——ダメ出しではなくヨイ出しする
8——主導権を握る
コラム3 学級の状態を学年の先生に報告する

第四章 授業で学力を保障する……107
1——箇条書き的に話す
2——不要な音を出させない
3——「教えて考えさせる授業」のススメ
4——スキマ時間をつくらない
5——誰でも手を挙げられる発問から始める
6——最初の発言をほめる
7——量で区切るか、時間で区切るか
8——授業の荒れは子どもの声
コラム4 相談役をもつ

第五章 ウソを暴く……145
1——子どものウソには理由がある
2——ウソをつく子どもの特徴
3——自由に気持ちよくしゃべらせる
4——矛盾を指摘する
5——損する経験がウソをなくす
6——友だちの行動を尋ねる
7——子どもの言い訳を代弁する
8——ウソは人を悲しませるものだと諭す
コラム5 挨拶一つでホッとさせる

第六章 いじめに対応する……165
1——いじめ問題と向き合う
2——いじめのダメージは自然災害以上
3——いじめられやすい子どもの特徴
4——加害者になりやすい子どもの特徴
5——いじめの起こりやすい時期
6——いじめを発見する
7——いじめのサインに気づいたらすべきこと
8——いじめ対応のやり方
コラム6 先手必勝を心がける
第七章 学級崩壊に対応する……199
1——学級崩壊を理解する
2——低学年の問題行動は、なぜ広がるのか
3——低学年のトラブルをおさえる3つの手立て
4——中～高学年の学級崩壊はこう起こる
5——中～高学年の学級崩壊対策
6——学級集団とのかかわりを考える
7——高圧的指導を避ける
8——凌ぐ
おわりに……230

第一章 教師のあり方を見直す

★1——よりよい教師になるために

◉理想の教師像を研究する

教師になったからには、誰だって「よりよい教師になりたい！」と、思うものではないでしょうか。それと同時に、こんな悩みを抱くことはありませんか。

「私は根暗だから、教師にふさわしくないのではないか……」
「ぼくはがさつで、教育者としてダメなんだ」
「神経質すぎて、カリカリしちゃうから、教師として不適任なんです！」

もしも、そんな風に考えているならば、ちょっとちがうのです。
１９２０年から、「理想の教師像」を追求する研究がされています。
これはなんと、１００年以上も前からこの研究がなされているのです。
成果の出ていない教師の特徴を集めていき、そこから逆に、「理想の教師像」を抽出したというものです。

そのような研究によると、**「すぐれた教師になるために、ある特定の人柄を備える必要はない」**と結論づけられています。内向的とか社交的とか、神経質とか大ざっぱとか、そういう性格的なものではないのです。
人柄ではない。
だとすれば、一体どのようなことが、教師のあり方として求められているのでしょうか。

◉子どもがもつ「第一感効果」

イスラエルのある研究を紹介します。
その研究では、高校生が「会ったことのない教師」の映像を10秒だけ見せられました。
そして、「教師がどのように教えるのか」について、その教師を評価しました。
会ったことも、話したこともないような教師の映像を見ただけです。
それなのに、評価の結果は、その教師が実際に受けもっていた生徒たちの評価した内容と、酷似する結果となりました。
つまり、なんと子どもは、10秒という驚くほど短い時間で、自分たちの目の前にいる教師を評価することができるのです。

この現象は、「第一感効果」と呼ばれています。

教師と子どもは教室の中で、たくさんの時間をともに過ごします。

10秒どころではありませんよね。その長い時間の中で、教師に対する印象を「やっぱりそうだ」と強化したり、「いや、意外とちがうな」などと修正したりするわけです。

では、この印象をよいものにするには、どうすればよいのか。

それは、教師が「肯定的でオープンな態度」を示すことにあるとされています。

たとえば、次のようなことがあてはまります。

- 教室の中を動き回る
- 打ち解けた様子で体を向ける
- よく笑顔を向ける
- 直接目を合わせてくれる
- やる気を起こさせるように声かけしてくれる

全体に対して行うというよりも、個人と接することが重要になります。

つまり、授業を受けながらも、「私」という個人とどのように向き合ってくれているかを、子どもは見ているということになります。

◉どのように語るかが重要

また、授業の際にも注意すべき点があります。

言葉でものを伝える際には、教師が「何を」語るかよりも、「どのように」語るかが重視されます。

たとえば、「声のトーンがどのような具合であるか」とか、「説明の手法がどうか」とか、そういう非言語的な部分に、子どもは注意を向けています。

エリシャ・ババード博士は、このような教師の非言語的な特徴が教室にどのような影響を与えているのかを調べ、次のようにまとめました。

「行為は繊細で、暗黙的で、一見すると目には見えない。
けれども、それらが生徒に与える力は強烈である」

◉ 教師力＝コミュニケーション力

子どもたちは、教師の人柄を見ているのではなくて、「私」という個人とどのようにかかわっているのか、授業をどのような雰囲気で進めていくのか、などを見ています。

つまり、子どもは教師の「コミュニケーションする姿」を見ているのです。

人柄とか、性格とかではないのです。

子どもとのコミュニケーションの質を高められる教師が、よりよい教師であるということがいえるでしょう。

★2——子どもの「表情」や「しぐさ」から本音を読みとる

◉非言語のコミュニケーション

コミュニケーションの力を高めるためにはどうすればよいのか、ということについて触れていきます。

「ノンバーバル」のコミュニケーションができるようになるためには、相手が見せる表情とかしぐさなどから、どのような感情を表しているのかを知ることが大切です。

微細な表情の変化を読みとって、知識と照らし合わせていくようにします。

そうすることで、子どもの心理や感情を見分けることができるようになるのです。

◉「表情」は心の中身を映し出す

人の感情は、さまざまな表情となって、顔に表れます。

そもそも「表情」というのは、人間が進化する過程において、目の前に起こるさまざまな出来事に適応するために反射神経が残ったものであるといわれています。たとえば、驚いたときに、